抑止とその限界について

九条の会 いせはら 共同代表 北山 宏之

日本周辺は厳しい安全保障環境なので軍事を増やして抑止力を高めないと、という説がある。
特に抑止力についてどう理解すべきなのか、ということで2022年の世界７月号「抑止とその限界」（藤原帰一　国際政治学）を何回も熟読した。

ウクライナ戦争は、核を含む抑止力が破れたことによる結果なのに、日本ではなぜか、抑止力を強めるべきだ、しかも中国に対して、という奇妙な光景になっている。抑止戦略とは何か、抑止には限界があり、すべての戦争を抑止することはできない、なぜ抑止は破れたのか、などをめぐってそのエッセンスを以下にまとめてみた。

今回の戦争では核抑止は破れなかった。核抑止は核兵器実戦使用の恐怖が支える均衡にほかならない。問題は、核兵器によって通常兵器を用いた軍事行動を抑止することができるのかという点だ。もし核抑止が十分に安定し、核保有国がお互いに核兵器を用いて戦うことが困難になったと言える状況が生まれたならば、相手が核を使用する可能性を恐れることなく通常兵器による軍事的な侵略に訴えてしまう危険が生まれる。
核抑止の安定が通常兵器による力の均衡を不安定にしてしまうという、安定・不安定パラドックスと呼ばれる状況である。ウクライナ侵攻後、ロシアの指導者は、ロシアは核による反撃を辞さないという、核恐喝の発言を行なった。自国の核兵器を盾に使って相手の核攻撃を阻み、NATOの直接介入も阻止するという戦略をここに見ることができ、安定・不安定パラドックスを戦争の手段として使っているといってよい。
結局、通常兵器による抑止は核抑止よりも信頼性が低く、核抑止が保たれていたとしてもそれだけでは戦争を阻止できなかったことは、決して驚くべき結果ではない。結論として、今必要なのは、抑止への依存ではなく抑止の限界を見据えることであって、抑止の破綻を前に中国への抑止力強化を求めることに意味はない、としている。

さらに、核兵器禁止条約第3回締約国会合（2025年3月）の報告書では、
核抑止については、有効であるという確証も、有効でないという確証もない。しかし、核抑止が失敗する可能性があるという事実には争いの余地がない。核保有国がエスカレーションを制御し、誤算や事故を回避できるかどうかは不確かである。それは、ニアミス、事故、誤算、幸運な回避といった過去の事例が証明している。核抑止が過去に大規模な戦争や核紛争を防いだという主張も、決定的に証明することは不可能であり、今後も想定通りに機能する確証はない。そして、軍事領域における新たな技術や新興技術の利用は、不確実性を劇的に高め、新たなリスクをもたらす可能性がある、と指摘している。

以上２つの文献より、抑止は万能ではないことが腑に落ちた気がした。今後とも学び、いろんな立場の方と対話していきたい。